富田碎花詩集

手招く者

同人社版

千招く者

富田砕花詩集

同人社・東京

手招く者

富田碎花詩集

白人社版 東京

手招く者

詩集

招手く者

富田碎花

同人社

東京

MCMXXVI

詩集 手招く者

序

『手招く者』に收錄した諸詩篇は、主として一九二四年の後半から二六年の前半に渡る作品である、『蝶と幻想』と『風を聽く』のニグルウプがこれに當る。それ以外はすべて著者の前著から再錄した。第四詩集『登高行』は發行直後、その發行所に或る事情があつて發賣する機會を失つた不幸な詩集であつた、さうした故障は著者に苦い經驗を嘗めさせた、從つてこれを手にすることの能きなかつた諸友からの慫慂がこの機會に擧げて再錄を敢へてさせた理由である。『支那詩集』は別な意味で――あの大震火はその紙型及び殘本のすべてを絕滅した

――それに倣つた。――即ち、『手招く者』は詩集としては著者の『末日頌』、『地の子』、『「時代」の手』、『登高行』の後を承ける第五詩集として受取らるべきものである。この詩集の著者は、いふまでもなく質に於いては多少の自負が無いでも無いが、相變らず量に於いては僅少の作品しか諸友の許に致すことが能きないで過してゐる。然しこれは必ずしも著者の怠慢の故では無いのである、この數年間讀書と思索に捧げる時間の多くを持つことに專念した著者は、さうした方面の努力にもやうやく曙光を認め得る時機に到達し得たことを諸友に報告する欣びを有つ。從つて此後は多少とも從來よりより多く制作に沒頭し得ることと信ずる。

餘事ではあるが、著者が山谷と曠野とを問はぬ放浪癖は救ふべからざるもの

になつてゐる、そこには、著者が一個の貧しい詩人として求めて熄まぬものの姿があつて、絶えず地平線とスカイ・ラインの彼方から手招きするのを覺知する、所詮、この放浪癖は墓穴にまで及ぶのであらう。また著者が『登高行』の序に於いて感謝の辭を寄せた山友達のうちの三人は、今夏、歐洲アルプスの峯々谷々を獨佛伊墺瑞の各邦に跨つて放浪してゐる便りに接した。また他の一人は無事さうした山旅の幾つかを終へて最近に歸朝した。而して著者はその青春の凡てを擧げて生活した東京――そこをめぐる郊外は、辛うじて追憶を裏切らない程度の風景しか殘してゐないであらうけれども――の、中んづく著者が最も愛惜して止まない季節である秋の氣に涵つて、その友の一人の書齋――舊武藏野の一角に建てられた――にあつて、そこの窓から折からの澄み渡つた碧空を

仰ぎ、樹々の梢を吹き過ぎる風の囁きを聽きながら、この新詩集を編み終へたことは無上の欣快を覺えるものである。恐らく、著者はこの詩集の校正の暇々を、たまたま出京したこの機會を捉へて、まだ稀には殘されてゐるであらうこのありしがままの武藏野の隅々を、けものの如くさまよひ歩くことの喜びに胸を躍らしてゐる。（一九二六・九月、東京西郊にて）

蝶と幻想

蝶と幻想

かくも荒れて寥しい花の群落を見たことがあるか、
それは暗灰色の岩場の幻想である、
人の心は
いま、風に漂ふ
蝶を逐うて翔ける。
渦まき、滾る濛氣を縫ひて

花瓣の如く散る高根の蝶の群れ
——それらこそ風を得てかろく羽ばたく
わが幻想の相ではないか。

幻の墓

私はいつも幻の墓を描く、
氷河をその裾に捲く
尖峯の絶巓に、
大概の日の明け暮れは
氷霧によつてその墓がまかれてゐやう、
稀に晴れた日の朝なれば

それは薔薇色に粧はれてあらう、
また惠まれた日の夕暮なれば
亡靈を想はせる灰鶸色に
寥しく荒れた容を
空間に懸けて。
燃え滾ぎる大地の核心が
悠久の蒼穹に對つて
話しかける言葉は
かくも冷たい傳導に依るのであるか、
回教の苦行僧の

尖塔からの祈禱が
空しく沙漠の風に散るやうに
私が描く幻の墓は
氷霧の空間に
その容を幽顯する。

寂境

朽葉と苔の間を
潛みくぐる
水！
靜かに、さびしく燃ゆる太陽の燦光のなか
制御せられざる大氣は
朗かに大自然に遍滿し、

よき母親の、乳房に縋る嬰兒に於ける如く
寛き心もて
人をして貪り食ふに任す。
ここなる大氣は
新鮮なる林檎の如し
齒の音立てて
食はるべし。
かかるときの
山旅に疲れしひとの
生命の澄みやう！

死の誘惑

凡そ人はつねに測り得ざる死の
脅しに待たれるといふ、
——かかる艱難の連續を次ぐ
登高にありて、死は
むしろ親しき兄弟の關係をもつて
人を撫愛する、

死は狂歡の娯母であり、
盡くるなき饗宴への招待者である。
恍惚たらしめる景觀は
世界の涯を探ねて求め得たる盛飾の限りを展べてゐる、
死は畏怖の影を曳くと誰れか云ふぞ
その朗かなる誘惑は
人をして微笑せしめ
ひたすらにその招きの方に急がしめる。

犠牲

風と、霧と、光のなかに
默々とその姿を現し、匿す
岳の、
時として
求めるものがある、
——それは人間の犠牲である。

自然よ、われは君の
つつましき捧げものを脚下に踏みしだきて
心驕りを覺えむとするものに非じ、
知らずや一投足に全き生命を打込み、
一擧手に全き呼吸を凝りつつ
這ふが如く攀づる登高者の
邪の念を絶したる隣間の連續を。

岳よ、孤高なる自然の寵兒よ、

君は、君に寄する思慕の情感の
最も強く烈しき者を
その犠牲として求めるといふ、
凡そ、かかる自然の招待(まねき)は
登高者をしてその永遠の墳墓を
雲霧の去來する峻峯の頂に求めしめる。

風の路

人の通ることの稀(まれ)な
ここの峠の徑、
風ははげしく
彼方の峽谷から
此方の峽谷へと
辿るものに吹き當てる、

夢を逐つてゆく
多幸な山人の
重い足を輕く撫でる
展げられた風景！
その飽くことない眺めが
人をして踴躍しつつ
黑い峽谷にその姿を
吸ひ込ませるのだ。

火の描ける

一日の、
生命をかけた、激しき
山歩きの後の
食後——、
焚火を圍んでの
樂しき會話！

燃え壊れる薪木の炎が
靜かな峽谷を覆ふ
樹壁に、
人知れず描く
像、人の像、
それは峽谷一ぱいに
擴がり、伸び上る……
心の相だ。
我れと我が脅しに慄く
愉しき戯畫よ。

岳の日沒

やまなみの、つらなりの
かなた遠く果つる陽の
映えをこそ受けたれば
仰ぐここの岳の
鋭峻なる岩壁の
色のさてもゆゆしさよ、

その揺ぎを見せぬ灼鐵の肌に
この世のものならぬ
匂ひをぞ漲らせて、
しばし山の子を
物思ひに沈み潛ます。
ああ、
誰れかかかる一瞬を有ち得たるとき
みにくき人生の相を、
この境にまで描き、像る煩ひをなさむや、
冷たく燃え狂ふ夕陽のなか、

閃き光るは岳樺より散る葉か
否、
否、
高嶺の蝶のありとしもなき風に
舞へるなり、
二つ、三つ、また五つ……。

巓の歡び

身はこれ神を讃への一本の燭火、
風荒き巖のうへに
みづからを護りて立つ。
簡素な祭壇には
何の捧げものとて無い、
そこに呼吸づくは

荒寥たる風貌の自然である！
嚠喨たる樂音でもあることか
それは
虛しく吹き過ぎる風の奏づるところのもの
慶ましく抃舞をつづけて
昂揚を希ふ『精神』は
ひたすらなれども
その姿は伴侶とて無い
孤獨な旅人を想はせる、
私たちのメッカ

雲表に聳える高嶺のいただきは
さびしい狂歡の休息所であつて、
爆發すべき喜悅は
ひそやかに內に向つて嚥(の)み下ろされるのである。

調和

男性的な線を
强く、鋭く、蒼穹に
つき上げ、つき上げ
描いてゐる岳、岳、岳！
卿が裝ふ岩の衣(ころも)は
あまりに堅く、武骨だ。

だが、それを刺繍してゐる殘雪と、
高根の花、花、花！

ざ・あるばいん・しいあた

飽くまで
沈默の大觀衆は
悉く白衣の裝ひをして
固唾(かたづ)をのんで控へてゐる。
萬象はよき諧調をもつて
相牽(ひ)き、相依る、

何といふ廣大な圓形劇場！
かかるなかにあつて
一切の劇術の黃金律は
藁の餘燼よりも脆くくづれ去らねばならない、
新しい生命の詩人の
書き下ろす作こそはこれだ！
身みづから一役を引受けて
宇宙の大舞臺に躍り上つた
悲劇役者がこの俺れだ！

岩小屋の夜

力乏しい燭燈ながら
照らし出される心の隅々は
よろこびに滿ち、
描くまぼろしは
飽くまで朗かに
翼ひろげて羽搏く。

明日の光の約束は
全き黑暗のなかに
內なる瞳にのみその堅固なる
誓ひを綻ばせて
しきりに燃え、燃ゆるなり、
おお、夢に搖れ曳く翼ある躍
——その輕さよ、
而かもその現實の運びは
連り續く艱難に對つて
十字を切るに疲れて

喘ぎ、喘ぐ——
（されど打拉がれての故には非ず。）
まぼろしの地圖！
その一點に臻らば
廣濶なる未知の展望は
かぎりもなく
白く簇りつづきて
花の如く咲き、
蒼海の潮の如く湧き泡立ち
山谷の放浪者を迎ふべし、

かかる期待こそ
荒(すさ)めるたましひにとりて
幼かりし日、
母の胸に眠りて聞きし唄(うた)、
それにも優る撫愛なり。

渦ける想ひ

霧は魔術師！
濛々と峡谷から湧きのぼつて
明るく光る展望を奪ひ、
仰ぐ巌の峭壁さへ
妖しき伊吹をうけてその姿を掻き消しつゝ。
——さては渦まき起る風が

人間に送る雨雹の鞭、
自然の暴き虐げに對ひ
身を楯として護る
この精神！
その渇ける想ひは、つねに
つつましけれども
堅忍不拔の烽火を擧ぐ。

風を聽く

影に

人、若し地に曳く
おのれの影なきに氣附かば
安からぬ思ひ募りて
耐へ難かるべし。
暗夜に、
吸ふ煙草の、

一滴の血を想はすその火——
明るき日光の下ならば
むらさきにも見ゆるべきその煙の、
影もたぬおのれの姿に似て
見えわかぬさびしさ
——人よ
かかるわびしさに耐へて
書き綴るわが詩ぞ！

夕の祈禱

圓き鳥、
けふも、その黄金(こがね)の翼ひろげて
靜かに羽搏き去りぬ。

空の碧うすれて、
いま、すみれ色に匂ひ

たたかひの人も、心やわらぐ。

痩せ、節くれ立ちたる
指をおもはす裸樹の枝々にも
露はなる祈禱は懸けられたり。

地に即けるものの最も小さき
願ひ、——明日の日もまた平安を
與へたまへ、と。

原始を探す

——野蜆(Noppero)原生林に在りし日のために——

遠い昔の日、
やや智慧といふものを獲得した人々が
幕屋を張つて
その憩ひの場所をつくつた如うに、
さうした素朴な匂ひのする生活の樣式が
誘ふちからを内に感じた人々——

私たちは森林に入つた
そして獣や、鳥や、昆虫だけが僅かに知つてゐる『原始』を探すのだつた。

そこに、――森林のなかに
漲り溢れて飢ゑた人のために貪るに任すものは
全く慌しい生活に脅され、疲れ果てたたましひを撫愛する
『彼れ』の伊吹である。

私たちは、静かではあるが力強い言葉をそこで聽いた、
たとへそれは樹葉の囁きに似た低い聲音であつたにせよ、

内なる耳は、すでに開かれて敏捷であつたから。
また生けるものの斯くあるべき姿がそこには遍滿してゐた、
たとへそれは仄かに光る幻象のやうであつたにしても、
すでに拭はれた内なる眼ははつきりとそれを視た。
またそこには生命の醍醐味が泉と溢れてゐた、
人間がその杯に頒ち與へられるのは
わづかの滴りの如うにではあつたが――
而かも内なるものは飽くまで滿喫し得た。

人よ、かかる生活を遁竄であると速斷してはならない、

かかる日の記憶が働きかける
現實の日の潤ひを想つても見よ、
——惠まれぬ現實の日の石ころ路に。

風を聽く

風は海のやうに鳴つて
戸外の闇をどよもし
遠く消えてゆく——
かなしさを誘ふ節奏ではある！
日々の生活の破綻は

煩はしいジャヅにまぎらされ勝ちではあるが、
かうした夜には
越え難い罅隙を人生に開けて見せる、
それはあまりにも傷々しい幻象の息づきではある！

かかるときに描くは
戰ひに挺身する勇敢な闘士ではない、
雨雹に頰を鞭たれる敗卒の後姿でなくてはならない。
冬夜、
海のやうに鳴る風を聽きつつ

人は乏しき火種を攪く。

聲

時と、處を擇ばず
寒く人の心を脅す
最も小さき聲にして
同時に最も人が聽かんと焦燥するそれは
そのあるじの姿を何處にかくしてゐるか。
そのためにこそ彼れ――詩人は

次の日の糧をすら保證せらるることもなく
身とたましひを曝して
荒き風のなかに
そのさすらひの旅をつづける。
彼れにとつては飾燈かがやかしい
大廣間の盛宴の場所も、
身を埋める椅子も
野の石多い濕地と異るところが無い。
ああ、その聲、
その聲のあるじは何處にあるか?

雪嶺禮讃

聖燭

仰げばいや高き蒼空、
この日、我が生命の
如何ぞ渺たるをおもひ得む、
白妙の覆衣(かけぎぬ)を裝ふ
彼處、白玲瓏の天壇のうへ、
凝りて燃ゆる想ひは

聖燭のごとし。

やがての日、
五彩の群落を織るべき
このもかのもの草木帶も
いまはその生(いき)のちからを全く潛め、
冷たき焰を湧き立たす氷雪の底に眠る。

64

ああ、
胸を衝き溢るる讃仰のまへに

65

人間の言葉の力乏しさよ、
祈禱は
風荒きかかる境にして
ただ火花を散らすのみ。

足あとに咲く花

空晴れ、
空晴れ、
陽(ひ)の光、痛きまで
眼を刺しつつ。

人は高きを仰ぎ、

念ひを專らに
ただ攀づることをのみ想ふ、今。

踏み過ぐる歩み、
歩み、
從つて咲きこぼるる淡紅の花、花。

白き恐怖の
默して微睡む谿谷(たに)は
季節を狼敗せしむる花苑なり。

傳說の發端

季節のものでないものを
見出でた驚異！
それは——
白雪を被ぎ裝ふ針葉喬木帶から
夜と白日の架徑に、
搖曳する薄明の空間で

夢の如く咲き匂ふ高根薔薇！
その一輪にも比べ得られやう
遠い雪嶺、
その全容にはすでに
空白な世界の何處からか
私かに太陽の花聟が
囁きを送つてゐるのだつた、
その色は現實のものとしては
あまりに夢と幻につつまれ過ぎてゐる、
まこと季節のものでないものを

見出でた驚異と歡びとに
人間の瞳はぴつたりと吸ひ寄せられてしまつたのだつた、
――さて、
これを發端として薄明の空間に
咲き出た高根薔薇に就いての山の人の物語は出發する。

生命燃ゆ

がつしりとした
岳(だけ)の踏張り！
拔き差しならない萬象の存在！
すべてが單調の白一色ではあるが
くつきりと高嶺の頂にまで伸ばされ、伸ばされた
雪庇の鮮かな線、

——その或る部分を掻き消して
濛々と奔騰する音の無い嵐、
白い嵐、
（——やがて或ひはおのれもその渦巻のなかに昏倒せしめられるか
も知れない）それを仰ぎながら
聲をのんで讃歎してゐる
此處、白雪に覆はれた草木帶に立つ自分！
やがて到りつかう彼處、天壇の頂に立つて
みづからのたましひを炷き
その香煙の

さらに高きに冲るを想ふことの
いかによろこびのかぎりであることか、
人の生のよろこびは
その瞬間にこそ燃え上るのだ
いのちを傾けて。

吹雪の後

夜をこめての
吹雪から解き放された
積雪のなかの
裸木よ。
枝幹が擧つて天を指しながら
一向に捧げるのは何の祈禱か。

辛(つら)い、嚴(いかつ)い寒冷への赦罪(つみのゆるし)をでも乞ふやうに、
それらが無言のうちに表現する
寛恕と、忍耐とは
吝かな人間の心を鞭つ。

ああ、
かがやく朝の光のなか、
そこに浮彫された
裸木の枝幹の黒と、
滿目の積雪の白との

胸躍らせるその諧調。

氷樹の原を過ぎて

これは
處しき境の生きもの、
白き風吹き荒ぶなかに
默然と立ち竝び
互に想ひを通はすこともなげに
おのれおのれのかたちに

生命を硬直せしめて。

夜となく、晝となく暴ぶ
吹雪のなかに歎くこともなく
時としての氣まぐれの陽のおとづれに
よろこびもせず
ただ時劫のむなしきなかに
默々として立ちつくす
白き生きものたち
——氷樹。

雪白の高嶺つづきの彼方、
むなしく咲き匂ふ
曙の花を晨に打ち眺めながら
（それも稀れに訪るる『幸福』の如く
脆くくづるる花瓣を想はしむるもの）
煙の如く
雪線を攀ぢのぼり、攀ぢのぼりつつ
たまたまそのかたちを運び來たれる
人の子を、今日しも、この境に迎へたり。

人の子は、
辛うじて凍てつき殘されたる
一滴の血潮の溫みを
慈しみ抱くに忙しき間ながらも、
大雪嶺の
前哨なる、白き生きもの
それらの犯し難き姿に
呼吸をのみつつ
讃歎これを久しくせるなり。

かかるときこそ！
詩人の靈魂は目覺むべきなり、
身肉を嚙む寒冷は
直ちに薪木となりて
靈感を燃え上らしむべきなり。
大雪嶺の巓にありて
さしまねく桂の冠は
我が瞳深くすでに貫き彫られたり、
今ぞ！
生命の踴躍のまへに

一切の障碍は慴伏せり。

我が想ひは
かぎりなく謙遜(けんそん)をなすを忘れしにあらねど
抑へ難き矜持を覺ゆるなり、
而して、今は招かれざる客に非ずして
正しき席を占むるものの
心足らひを感じつつ
宇宙の饗宴に臨む我れなり。

おお、
瞬時ののちには
恐らくは渾沌として湧き泡立つ
吹雪の波濤に姿を掻き消すべき
彼所、白玉の王座にこそ
我が永遠の歩みは
停むべきなり。
——かく人の子はよろこびにうち慄きつつ、
次ぐ一歩に踴躍の翼を感じたり。

山岳悲歌

冷たい火花

急雨の灌奠(くわんてん)の後を
虹は護摩(ごま)を焚き
樹々は
一齊に脊延びして枝を、手を
大空に向つて擧げる、
そこには

永遠の謎が、赤い窓を開けて
生きものの祈禱を吸ひ込む。

凄じい幻だ、
虚空を望んで攀ぢる人間のたましひの
冷たい火花。

投げ棄てられた鑿

彼れは、
どこから先づ鑿を當てやうかと考へた、
山岳の巨像は
押し默つて彼れの想念を壓し迫つて來る、
身動きのならない苦しさだ、
次いで呼吸の突止が來た。

昏倒しさうになつた彼れは危く起き上つて、
再び鑿を握る手に力をこめた、
だが、どこに鑿を當てるべきかに迷ふことは依然として異るところ
が無い、
相對してゐる山岳の力はあまりに大きい、
そこにある自然は拔き差しならぬ張りを見せてゐる。
彼れは吐息と一緒に鑿を投げ棄てた、
人間の非力を想ふの念に魂を湧きかへらされながら。

香煙

試みに地上三千米突(メートル)ほどの邊を劃ぎつて
霧で、それ以下を閉ぢて見やう、
私がいま立つてゐる絶巓は、島のやうなもの、
この邊の山稜は、
まア群島だね、
一寸、海の底の人間の世界のことを考へて見やうか、

——イヤ
とても考へられないほどそれは遠い遠い世界のやうな氣がする、
だが、待つて呉れ、私のたましひがそこから香煙のやうに
一縷高く炷かれてのぼつて來てゐるのを忘れてはいけない。

冷たく燃えるもの

八月の大自然のなかに
冷たく燃えてゐる山岳よ、
あはれな詩人、
彼れはその表現を喪つた、
彼れの想念は爆ぜ切れるばかりで、
胸は嵐のやうに懊惱し、

たましひは、臓腑を掻き廻はされる苦悶に浸りつづけ、
出導線は
差し延べる手を嘲笑して遠のき、遠のく。

表現を喪つた日
詩人の姿もまた冷たく燃える。

或る旅行記の一節

黒闇(やみ)は塗りこめてしまつた、
(滅多矢鱈に)
千年の湖沼も、
峻々たる山々も、
蠢々と樹(た)つてゐる大木も、
繪のやうな白樺の林も、

手の切れるやうな泉からの流れも、
ただ、
一つ、圓錐形の窓だけを殘して。

絶巓近く

身は、やうやく乏しくなつた草を吹く風のたましひか、
たゆたふのでも無ければ、
とどまるのでも無し、
ただ念ひをあつめるのは
次ぐ一歩である、
明るい空氣を鮮かに分けてのぼる次の一歩である。

傷々(いたいた)しい紫黑の身肉をさへ見せる遠方の峻しい嶺々、
物柔かな近くの峯々の皮膚、
雲々のただなはりやう、
いつまでも續くであらう寂しい吐息のやうな噴煙、
さては湖沼の布置など——
それぞれに生命あるもののやうに押し迫つて來る、
だが、これは肉體を自然にかへし盡したたましひである、
漂々として吹く風だ、
ただ念ひをあつめるのは
次ぐ一歩である。

五月の歌

旅人は草を藉いて
長い息をのみ込んだ、
——瞳は遠く
かぎりもない山脈が
辛夷(こぶし)の花のやうに咲き簇つてゐる
五月の空の

匂はしい邦の
幻想へと吸はれてゐた。

彼れの心は
胸をふるはせる喜びの日の追懐も、
凍てつく冬夜の
痛ましい街頭の彷徨も
この時、傷手(たで)として殘るには、
あまりに晴れ晴れとしてゐた、
たとへ快い憂鬱の影が

まるで無いとは云へなかつたにしても。

旅人には
いま、身と心とをつつむ青草の褥(しとね)と、
想ひを通はせる
遠く、遠くはてしなく流れる山脈と、
匂はしい空とが
夢のなかの實在として薫つてゐるだけである。

省略

重い白蠟の雲霧(ガス)は、
脚下の都邑と、田園と、
湖沼、河流、さらにそれにつづく遠くの海洋を封じた、
——そこに、生きものは大海の魚のそれのやうに動き、
昆布のやうな樹木が動搖してゐやう、
が、それらは想像を誘ふだけで、

私をとりまくのは
今や、音響と色彩を絶した世界である。

雲霧(ガス)の大平原、
その地平線のうへに
かぎりもなく、雪を被いだ山脈の浮彫の
稜角(プリズム)また稜角(プリズム)、
それらは——
私がいま此處にあつて
胸を張り、

ひろげられるだけひろげて
相對する雙手の兩端よりもなほ長い長い連亙を見せてゐるのである。

それらの或るものたちは
なほまだ生きものの世界には訪れることをしない太陽を敏感にとら
へて冷たく燃えてゐる、
何といふ大まかな觸致(クッチ)で、
グイグイ肉付けをして行つたことだらう、
恐しい藝術家の力が
拔き差しならぬやうに迫つて來る。

おお、
それらの雪白の山脈だけ！
そして雲霧の大平原だけ！
殘餘(あと)は鑿でぶつかいて萬有から省略しちまふがいい、
恐しい力は、
美は、おのづから頭を垂れさせるに充分である。

自主の峰

私の樹つてゐる峯だ――『自主』の峯だ、
私が雙の手を擧げながらの歡聲を
吹き散らし、吹き散らす嵐よ、
何處に暴れて行かうとする嵐だ、
私のよろこびを何處へまで傳へやうとするのか、
嵐、嵐、

私自身もいつかそれであるやうに
あらゆるもののうへを躍つて渦まく。
麓の方を渦まき、渦まいて過ぎる嵐、
その眞ただなかに、根こそぎ
さらはれさうになりながらも、
何といふその彈力性ぞ、
草と樹とは髮を振り亂して鬪ふ、
それから、
喘ぎながらも雄々しくみづからを
嵐のなかに曝露してゐる『自然』、

『自然』の一切、
そのうへに君臨してゐる峯だ。

曠野詩集

雪のなかの樹

これは念禱の姿である。
全く葉の落ちつくした樹は
無數の枝頭を
夕空へと
一齊に擧げて
無言の祈禱を描く。

そして、世界は、いま、
空しい白さに冴えかへつて
凡ゆるものは聲をのみ
壓し迫るやうに動く『自然』の歩みも
しばらく停められたかたちである。

おお、
數限りもない手を擧げて
あらはな祈禱を捧げる

雪の野のなかの
偶然の樹の立姿——
人は一心になつて
ここに、いま、樵路を急ぐ。

雪原の正午

時刻は正午、
盛れ上り、
さらに盛れ上つて地平に一線を描きながら
雪原は、
いま、瞳がうつしあます邊際まで
擴がり、擴がり

はてしない夢と幻とを匂はせて
寂然と靜まりかへつてゐる。
この一切の物の音と響とを絶した大自然の懐(ふところ)にあつて、
人は何で小さい敵意を露(あらは)にする勇氣が振へやう？
曾(も)ての日に有つた驚きと、畏れを、
少年の如く匿すことなく
無邪氣に開いて見せるのだつた。
ともすれば人生(ひとのよ)の扮黛は
厚く、粗朴な心を掩ひかくしてしまはうとする、
然し、自然はいつも人をそれらの魂を蝕む誘ひから守つて

徒(いたづら)な裝ひを輕んじ、蔑ませる。

霧の家

これは何といふ靜かな混雜さであらう！
『ドン底』を壓搾した姿の
ハルピン驛の四等候車房(スウトンホウチャフフン)、
午後三時の冬の日差は
厚く閉ぢた玻璃の窓々から
力なく落ち込んで、

四邊に怪しい斑の交錯を投げる。

窖から出て來た獸を想はせる姿
然し神のやうな顏容の西比利の百姓、
君が負うてゐる『自然』の暴虐も
君自身にとつては何の係りがあらう！
それは君を慴伏するどころか、
君がいつもの人の好い哄笑のまへにはいかばかりの關心事として威
力を示し得るか、
ホラショオ！　ホラショオ！

私は一切を飛躍して君の手を握る。
これは支那苦力の一群である、
凡ゆる人爲の障害を排除してその『生活』を突き進ませる人々の群
れである、
その人々は、置かれたところにあつて
その潑溂たる『生活』を生きる、
おお、汚辱と忍苦の闘士。
あなたの淑やかな擧止は

（あらゆるものから殘し去られたただ一人で）
そこの飾り氣も無いベンチには適はしくありません、
貴女は、貴女の側近くに置かれた
貴女の唯一の殘された持物であるらしい貧しげな包みのなかに
痛ましい物語を持つて居られるやうに思はれる、
私は、貴女を凝視する無禮は敢へてしますまい、
私の眼瞼は熱くなつて來た！

おお、さらに猶太人、芬蘭人、波蘭人、
高架索人——

その情景を梭のやうに織る
護路軍の支那兵士、露西亞人の驛員、日本の探偵、
これこそ見えない赤い、深い霧のなかに泛ぶガランとした蜃氣樓の
内部である。

地平線

いま、自分の立つてゐるところは
五尺に足らぬ、偶然の孤丘である。
雪の曠野は
眼界の限りを盡して展べ擴げられてある――
自分の吐く呼氣は、引く吸氣は
高い響を立てて、(それを聞くのは自分だけ！)

瞳にうつし餘されるばかりの押し默つた大自然のすべてに
電光の如くに照應して、やがてまた自分にかへつて來た、
人は、時として自分の心臟の鼓動に驚くことがある、
おお、久しく忘れてゐたその驚きよ、
行つても、行つても
さらに遠のく地平線――
憧憬に身をふるはせた旅人は
翔けらうばかりの想ひを放ちつづけて
徒に疲れを覺えてゐる。

松花江（スンガリー）

――スケツチ――

このゴンドラをつつむ風景の
何といふ陰惨さであらう？
否、
何といふ寂しい晴れ晴れしさぞ！
このゴンドラには唄は無いのである、

カチリ、カチリ、
骨の髓を削るかのやうな
寒く、冷たい音ばかり。
それはゴンドラの漕手（こぎて）の
跳躍する毎に生まれる
漕棒（さほ）の尖端の金具の
呻きだ。
カチリ、カチリ、

水脈のやうにはてなくつづく氷上の橋路を
飾りもないゴンドラが
辷る、辷る。

遠景には、
家から、家への大理石の吊廊下でもあることか、
曠野と曠野をつなぐ、
鐵橋。(それはまるで黒い虹のやうである。)

ゴンドラは云ふまでもなく伊太利特有の渡船なれども……

夜の街

蒼白く、眼に痛い街燈の光を浴びて、
修道尼のそれのやうな姿に
黒く、厚く、身をつつんで
映畫のなかの人物のやうに
音をも、響をも立てず
何處へ行くのか

婦人？
粉雪のなかを
犇とみづからを固く護りながら。

今、
ノウオ・トルゴワヤ街の、
夜も十一時と云へば
行人もやうやく絶えて
シネマの閉場を待つ
例の辻馬車の可憐な馬や、顔馴染みの御者の吐く息は

ホツホツと霧のやうに白く
煙のやうに粉雪のなかにうかがへる。

窃盗のやうに
呼吸を凝らして窺つてゐた自分は
三階の二重に閉ざした玻璃窓を拭き拭き
屋根裏の堅い寢臺から身を伸ばして
これらの情景のなかを、
夢遊病者ででもあるやうに
屋外に靜かに舞ひ狂ふ粉雪のなかに溶け込んで飛び廻はつてゐる。

觸手の彼方

何方を向いても、もう露西亞の匂ひで一ぱいだ、
氷野の小市街は
ペチカからの煙を吐いて
家々は縮かんで見える、
だが、家の內部では、
鉢植の護謨樹が青々と葉を茂らし、

サモワルは濛々と湯氣を漲らして、
談話者の胃の腑へ暖さを注ぐであらうし、
平和な團欒がそこには展開されてゐる、（――であらう場面が私には直接に感じられて來る。）
路面の氷の膚の寒む寒むとした色はどうだ！
街端れの寺は
建物に不釣合な大きな鐘を、
折からの晴れ澄んだ寒天に透けて見せてゐる、
これが白樺の裸木の林に圍まれてゐるのだから堪らない！
そしてその尖塔の金十字架は

破壊の手を他所に輝いてゐる、
まだまだ此處は昨日の夢の世界の連續だ。
馬橇の鈴の音は
益々もつて感傷を募らせる。
また小さい街を心臓にして
四方八方に遠慮なく展がつた
雪の曠野は、
濃い地平線を劃りに
あつちでもこつちでも大空との接吻だ。
長い航海のあと、遠い異國の海岸町のアスファルト舗道のうへを歩く

舟乘のやうな踏歩で、
飽かず歩いてゐるのは自分だ、
他人では無いこの自分なのだ、
ゆるくダン・ヒルから煙の渦を捲き上らせて。
おお、かう一ぺんに『露西亞』を押し込まれたら
氣狂ひになる！
胸ふるはせる憧憬の邦を
今、自分は踏んでゐるのだ。

言葉

言葉

この日、鷲は
燃ゆる太陽に向ひて
大空のかぎり
翼を擴ぐ。

人は默々として

あるかぎりの惱みを
土に種蒔きつつ、收穫(とりれ)つつ。

すべて終なき營みは
さびしけれども
力に溢れ滿ちたり。

希ひ

おお、單純に、跪座して、懼れ慄く心は
何處に喪はれたか？
胸ふるはせるよろこびをも
魂を搖り動かす悲みをも
みな、等並(ひとしなみ)に
推し論(あげつら)はうとして心は犇めく騷ぐ。

種々の武器をもつた人々は
聲を大きくして
捲き起した暴風雨のなかに
聲を奪はれた人々のために、
土塊のなかに深く埋められた靈魂のために、
それらの人々の本然の席を奪ひかへすために努めて呉れるがいい、
私は、貧しい私の藝術のなかに
傷いた友、
拒否された友、
——諸君のために席を用意して置かう。

取殘された影

突如、
我が心の風景は
畸形なものとなり終つた。
描かれた影は
濃く、鮮かに、澄澈として
なほここに呼吸をつづけるけれど

それらを投げた『本體』は――生々のそれは
現實の姿を喪失つた。
大きな、見えぬ手に奪ひ去られて
記憶の地上から拂拭されてしまつたのである。
たとへば
研ぎ澄まされた鏡面にうつし出された美しい姿だけが殘つて
人のかたちが消えたやうな――空虛！

我が青春の坩堝よ！
大東京よ！

あらゆる我が生命を投げ入れて、
悔ゆるところなく生き切つた『若き日』の搖籃は。
すべて餘燼もなく
一介の焦土と化し去つて
見るかぎりただ空白な
納骨堂を築き上げた。

（人よ說く勿れ）
遠からずして不死鳥の夢は
新しい都市のうへに現實の翼を羽搏くであらう、

が、
一たび歪められ終つた我が心の風景の畸形が
整へられ、正しくなる日は恐らく永遠に來まい。
——辛うじて大震災直後の東京に入る——

青い町

光る青葉のなかの町は
惜氣もなく放つ季節の香氣のなかに
昔ながらの裝ひで
息づいてゐる。
曾ての日、熱病む子供のそれのやうだつた
詩人の情操は

朗かな、然し物靜かな愉悅に愛撫せられて
微笑のなかに涵されてゐる現在である。
古い寺々からの鐘は
響かずもがな、
遠くを劃ぎる山脈は
紫に、金に、匂はしく暮れやうとする今である。
が、おお、
さらにその遠方から手招くものよ！
所詮、詩人は永遠に叛逆者である。

渡船場にて

行人の、
肌は心持ち汗ばみを覺え、
水の匂ひは
霧のやうに四邊を包み
五月の空は白く榮えて
惱ましさも一しほである。

河水のうへの
薄ら明りは、裂かれ、裂かれて、
花瓣のやうに船跡に散る、
なかにも、おお、戀する若ものの心臓の
燃え凝つて咲く赤い薔薇——船燈。

極北の頁

いぢらしく痛ましい靈魂よ、
君は何處へかへらうといふのか。

視野の一切は
灰色の霧のなかに踊る凍つてゐる交響楽で、
ジインといふ空洞のなかで木靈が

ほてもなく搖曳してゐる大きな空虛の世界だ、
その透明な水晶體の沙漠のうへにこぼされた
黑胡麻の粒のやうな人間が、
喚いたつて、叫んだつて、
答へるものはただジインといふ木靈だけなのだ、ただジインとい
ふ……。

それはそれでいい、
だが、(君は想像を中斷してはならない)
水晶體の巨大な母體で、

人々の焚き棄てた燃し木の灰のなかから、
翼馬(ペガサス)の迅速さで驅け昇つたものがある、
さうだ確かに驅け昇つたものがある、
そしてぴたりと帆船の大檣の突端にひつついた、
それは形體(かたち)の無いものだ、
だが人々は現實にそれを見た、
そして震へ上つた、
今し方、僚友の亡骸をメラメラと甜めつくした火は、
まだはつきりと人々の眼に烙きつけられてゐた。

人々は默つて錨をあげて
帆走る、帆走る、
噫、巨萬の富に代はる旺んな獵の獲物をさへも
人々は瞬間のほどは忘れた、
一心に帆走る、帆走る、
だが、暗夜のむかふから押し迫つて來る曙のやうに
また幸福な夢のやうに、
やがて遠い遠い港の紅い灯を想ふことが
彼れらに踴躍を感じさせるやうになると、
一切合切が霧のやうに忘却されてゆく……。

いぢらしく痛ましい靈魂よ、
君だけは何處へかへらうといふのか。

支那詩集

胡地の夕

愚鈍で、従順な家畜は
はげしく、思郷の念(おも)ひを湧きかへらせて、
夕空に、
聲ふるはせて、嘶(な)く。
旅人は、

いま、
胡地の夕風に
涙をのむ。

おお、胸を衝いて湧き泡立つ
この情感！
自分は、これを飛躍しなければならない、
これを振り棄てなければならない旅人である。

『歴史』は、乾き切つた沙埃（すたほこり）に塗（まみ）れ、

風物のなかから
徒らにその吸盤を
人に伸ばす。

たとへば
ここにして、一日の行旅のはての
風雨に毀（こわ）たれつくした黄褐（わうくわつ）の土砦（どさい）、
その土の色と照應した顏をもつ稀に薄い住民！

たとへば

ここにして、音を絶えた自然
——その涯から
のぞき出た圓形の妖靈！

たとへば
ここにして、魂をさへ凍らせて
『物語』のなかから
槍を投げる朔風！

愚鈍で、從順な家畜と

旅人の
姿が、長く、濃く
烙きつけられる……
かぎりない平沙の海の一點。

塞北風景

追はれた民族が
平沙の海を越へて
忍耐强い船を
いま、
港につけた。

船は
この宵こそ、乏しく貧しい休息が得られやう、
冷たい月光の下の駝棧(*たさん)！
その傍には凍てついた西溝(*シイコウ)が灰色の夢を結ぶ、
そこから絲を曳いた幻想——
(**)白天夜晩走(パーティエンエワンツオ)！

(*)駱駝の密集、土塀で囲んだ歸天の小區劃なり、その内部に駱駝を庇護いまで追ひ込んである。
(**)張家口(蒙古名カルガン)の大城門外にある河、凍てついてゐるそのうへを辿つて才壁(ゴービ)の沙漠の向ふの瓜倫(クールン)や、白帝城に近いドロンノールや、綏遠、歸化の両城の方への道路(?)がある。
(***)夜盜行。

洋河

疎林――といふのだから、
あんまり大きい樹ではいけない、
無論、葉は落ちつくしてゐるんだ、
君の佇立してゐるところは小高い丘なのだぜ、
河は平原の遠方から
一刷毛で、雲母のやうに描いて欲しい、

それが、君の脚の下を過ぎて
反對の平原の方へ筆勢をそらせる、
河の彼岸からは
直ぐに緩い斜面を見せる禿山の連亙を置きたい、
白晝ならば赭味を帶びてゐる筈なのだが、
夕方だからいふまでもなく灰白色で無くてはいけまい、
河を、雲母のやうにと注文したが、
それで凍つた感じが出たか知らん?
海拔四千尺近い高原だが、
雪なんか降らせては駄目だ、

水蒸氣が皆無で、乾き放題なんだからね、
無論、風の冷たさは朔北特有の針を揃へて攻めつけるやうなのさ—

——

牛や馬に荷車を曳かせて土民が、
その凍つた玻璃のうへを渡つてゐる、
君が佇立してゐるのは小高い丘なのだから、
その生きものたちは『馬は寸に、人は豆のやうに』といふ感じで憩
へて來なくてはならない、
あ、忘れた、
七日か八日の月、月！

無爲の祭司

深く、大地に根を下した
一本の立樹のやうな、耕人、
君の姿は
あらゆる主張を超え、
あらゆる論議を後退りさせる。

いま、
此所に立つ私に愬へて來るものは
ただ茫漠たる黄褐色の平野だけで、
深く冬眠に入つたそこからは
それを外にした色彩は絶無である。

乾き澄んだ碧空！
多彩な興亡史を嘲笑し、
音も響もない單調に還りつくして
押し默つてゐる黄褐色の平野！

いまは白晝である、
そこに、大地から生へ拔けたやうな
耕人、君の無爲の立姿にこそ
大自然は凝つて動かない。

おお、一切の文明よ、
それは手を拱いてゐねばならない、
この黄褐の大祭壇は
それ自身が四時の營みをする。

無爲の祭司である耕人に、
やがて春に綠を萌やし、
秋の收穫(とりれ)を贈る
祭壇ではないか。

詩集手招く者目次

蝶と幻想
蝶と幻想　一三
幻の墓　一五
寂境　一八
死の誘惑　二〇
犠牲　二三
風の路　二五

火の描ける　二七
岳の日沒　二九
巔の歡び　三三
調　和　三五
ざ・あるぱいん・しいあた　三七
岩小屋の夜　三九
渴ける想ひ　四三

風を聽く

影　に　四七
夕の祈禱　四九
原始を探す　五一
風を聽く　五五

聲　五八

雪嶺禮讃

聖　燭　六三
足あとに咲く花　六六
傳說の發端　六八
生命燃ゆ　七一
吹雪の後　七四
氷樹の原を過ぎて　七七

山岳悲歌

冷たい火花　八七
投げ棄てられた鑿　八九

香　煙　九二
冷たく燃えるもの　九三
或る旅行記の一節　九五
絶巓近く　九七
五月の歌　九九
省　略　一〇二
自主の峯　一〇六

曠野詩集

雪のなかの樹　一二
雪原の正午　一二四
霧の家　一二七
地平線　一三一

松花江　一三四
夜の街　一三七
觸手の彼方　一三〇

言葉

言葉　一三七
希ひ　一三九
取殘された影　一四一
青い町　一四五
渡船場にて　一四七
極北の頁　一四九

支那詩集

胡地の夕　一五七
塞北風景　一六二
洋河　一六四
無爲の祭司　一六七

大正十五年十一月十五日印刷
大正十五年十一月二十日發行

詩集手招く者

定價　貳圓貳十錢

版權所有

著者　富田碎花

發行者　神田區駿河臺西紅梅町十二番地　大島秀雄

印刷者　神田區今川小路二丁目一番地　井波修次郎

發行所　東京神田駿河臺西紅梅町十二　同人社
電話神田三四四〇
振替東京二七〇六五

同じ著者によりて

◇『末日頌』詩集（絶版）
◇『地の子』詩集（絶版）
◇『時代の手』詩集（絶版）
◇『登高行』詩集（絶版）
◇『手招く者』詩集

◇『富田碎花詩集』詩集

◇『民主々義の方へ』詩集（絶版）エドワアド・カアペンタア原著
◇『草の葉』譯詩（1・2既刊、以下續刊）ウオールト・ホキツトマン原著
◇『カアペンタア詩集』譯詩集

◇『解放の藝術』論文集（絶版）
◇『愛蘭文學研究』全五卷（近刊）